

琵琶湖疎水と哲学の道

小宮 一仁

田辺朔郎という土木技術者がいます。1861年東京に生まれた田辺は工部大学校に進んで土木工学を専攻し、卒業論文として「琵琶湖疎水工事の計画」をまとめました。この論文は海外の学術雑誌に掲載され、田辺は英国土木学会から最高の論文賞であるテルフォード・メダルを受けました。工部大学校を卒業した田辺は京都府に就職し、21歳の若さで琵琶湖疎水建設工事を担当することになりました。

琵琶湖疎水は、琵琶湖の水を京都市内に引くために計画されました。三井寺の麓で取られた水は、長いトンネルで比叡の山をくぐります。そして蹴上で京都の町に出て、南禅寺の水路閣を通り、市内の各所に運ばれて行きます。田辺は、この工事を指揮し疎水を完成させただけでなく、疎水を利用して日本初の水力発電所となる蹴上発電所をつくりました。この電気を使って、京都には日本で初めて電灯が灯り、市電が走りました。また、インクラインにより船が京都市内に入れるようにし、京都と琵琶湖の間に水運を開きました。琵琶湖疎水は、完成後 130 年近くが経った現在もその機能を維持し、毎年約 2 億トンの水が京都に運ばれ、水道用水等に使われています。

千葉工業大学は、2017 年 5 月 15 日に創立 75 周年を迎えました。千葉工業大学の創立に尽力した、日本を代表する哲学者である西田幾多郎先生は、設立趣意書に「広く世界に知識を求める好学心を持ち、日本だけではなくアジアを背負い世界文化に尽力する人物を養成する」と書きました。この理想は「世界文化に技術で貢献する」という建学の精

神として、千葉工業大学に関係する全ての人々によって今日まで脈々と受け継がれてきました。

南禅寺の水路閣を通った琵琶湖疎水は、東山を流れる小川になります。西田先生はこの小川に沿った小道を愛し、毎日散歩をして思索に耽ったそうです。そして、いつしか小道は「哲学の道」と呼ばれるようになりました。西田先生はこの小道を歩きながら、アジアの将来を担う千葉工業大学のことを、あれこれ考えられたのかも知れません。

平成 29 年 7 月 4 日